

見のための方法なのである。

夏休みの間に「こうあるべき」「こうあってほしい」という考えから少し開放されて、もっと気

楽に子ども達や周りの人たち、そして自分自身もつきあうために、私は今せっせとチンパンジーやボノボの本を周りに集めている。

(お茶の水女子大学)

『ミスエデュケーション』

— 子どもをむしろ早期教育 —

デイヴィッド・エルキンド (幾島幸子訳)

大日本図書

田代 和美



痛烈なタイトルである。早期に誤った教育を子どもに押し付けても、何の効果もないどころか、弊害さえ与えてしまうことをデータや文献の裏付けに基づいて著者は警告している。そして幼い子

どもを持つ人びとに、誤った教育の要因、子どもにおよぼされる短期的・長期的な影響、健全な幼児教育の見分け方、家庭における健全な教育の実践法を理解してもらおうというのがこの本の主旨で

ある。

教育産業はいまや花盛りである。これは学歴がものをいう日本独自の傾向ではなく、この書を読む限り、アメリカにおいてさらに激しく、その後を日本を含めた他国が追っているようである。著者は、この問題に関して親たちを非難しているのではない。子どもにとって最良のことはしてあげようと躍起になり、アメリカ国内の早期教育の流行に踊らされている親たちを生み出した背景を分析し、それに陥らないためのアドバイスをしているのである。

現在の日本の公的な幼児教育は、教育要領や保育指針に生涯の中で幼児期に育てたいことが明確に打ち出されたために、小学校のミニチュア化のような教育は行われなくなってきていると思う。しかしそれが、果してどこまで親たちを納得させるものとなっているのかは疑わしい。逆に親たちの焦りを生みだし、「幼稚園では何も教えてくれ

ないから」と言って子どもを塾に行かせる親もいる。もしくは英語や読み書きの指導等を看板に掲げた幼稚園に入れたがる親たちも増えているようだ。

著者は幼児に何かを教えることすべてを否定しているわけではない。知識を得ようとしている子どもにも適切な対応をするかぎり、誤った教育に陥る心配は絶対にはないと述べている。「幼い子どもは、親が読み書き・算数を教えてくれるのを、ただぼんやりと待っているだけではない。子どもは自分の身のまわりの世界を探検し理解するために、莫大な時間と労力を費やしているのだ。健全な教育とは、こうした自発的な学習を助けることにはかならない。早期教育の誤りは、教えること自体にあるのではなく、教える事柄と時期が適切でないことにある。子どもがその時点で学ぶべきものを無視し、親の都合で何かを教えようとするとき、子どもは不必要な危険にさらされるのであ

る。」今の日本でもそのまま伝えたい言葉である。

誤った教育に陥らないために親たちに必要なことは、子どもがその時点で学ぶべきものの中身を理解することであろう。エルキンドは、誤った教育のもたらす弊害を分析する上で、エリクソンのパーソナリティー発達モデルが有効であると捉えた。エリクソンが、幼児期に獲得すべき課題としてあげた「信頼感」「自律心」「自発性」「勤勉さ」に「帰属感」と「有能感」という二つの課題を付け加え、このような特性を育てることこそ幼児期に必要な課題であることを説いている。「信頼感と自律心、自発性と帰属感、勤勉さと有能感——これらをしっかりと身につけた子どもは、小手先の知識や技術はふんだんに備えていても、健全な自己意識を持たない子どもよりも、よほど社会に出てからの適応力や対処能力にすぐれているのです。人生における成功は、知識や技術によって

保証されるのではなく、健全な人格によってたらされるのです。」という言葉にそれは集約されている。「人生における成功」というのがアメリカらしい発想である。幼児期に健全な自己意識を持った子どもが、いずれは社会で成功するという話は、個人的には腑に落ちないが、少しでも早くと焦っている親たちの目的が子どもを社会で成功させることであるのだから、そういう言い方は日本でも親に対して有効なのかもしれない。

しかしまた「アメリカ社会では、問題があることがはつきりすれば、何らかの対策がとられます。現在、誤った教育の要因や弊害についての社会的認識は高まりつつあります。誤った教育に警鐘をならす専門家も増えていきますし、マスコミも徐々にそうした見方を取り上げるようになってきています。」という点は、自浄能力のある社会とない社会の決定的な違いを感じる。日本はどこまでいけば気づくのだろうか。すでにマスコミも取

り上げつつある問題ではあるが、「そんなこと言ったって学歴社会は現実にあるのです。」という現状を強調する一言で遮られてしまいそうである。

幼児期に著者が述べたような健全な自己意識を育てることができたら、それ以後の教育がたとえ全く違う価値観で授けられたとしても、満遍なく与えられたことをこなす人間ではなく、自分の好きなこと、得意なことを選び、それを伸ばしていく人間に育っていけるだろう。それが著者のいう

人生の成功かどうかは定かではないが、少なくとも幸せな人生ではあるだろう。急げ急げの流れに乗らずに、子どもが今大切にしていること、まさに立ち向かっている課題を大切にできる大人であり、親でありたいと思う。時代が変わっても変わらずに受け継がれなくてはならないことをしっかりと見据えていくためにこの書はまさに私にとって心強い一冊である。

(お茶の水女子大学)

ベッツィ・バイヤースはいかがですか

『白鳥の夏』(掛川恭子訳 富山房)